

日本小児科学会学術・国際渉外委員会
研究活性化ワーキンググループ報告

日本の小児科学研究の現況

委員長¹⁾, 委員²⁾, 日本小児科学会学術・国際渉外委員会委員長³⁾,
日本小児科学会学術・国際渉外担当理事⁴⁾, 日本小児科学会会長⁵⁾

研究活性化ワーキンググループ

吉川 徳茂¹⁾ 遠藤 文夫²⁾ 香美 祥二²⁾ 加藤 光広²⁾
小崎健次郎²⁾ 白石 公²⁾ 高木 正稔²⁾ 中村 秀文²⁾
野口 篤子²⁾ 森 臨太郎²⁾ 高橋 孝雄³⁾ 井田 博幸⁴⁾
大藪 恵一⁴⁾ 小島 勢二⁴⁾ 五十嵐 隆⁵⁾

はじめに

日本小児科学会はわが国の小児科学を発展させて社会に貢献することを目的とする学術団体です。わが国の小児科学という学術活動を発展させることが最も重要な使命です。私どもは基礎研究と臨床研究を含め優れた学術活動を行い、優れた成果を世界に発信することにより内外から初めて評価される存在と考えます。平成 22 年、日本の小児科学の研究を活性化するために、日本小児科学会研究活性化ワーキンググループが立ち上げられました。これまで、臨床研究および基礎研究の現況と研究活性化のため何をすべきかについて検討してきました。まず日本の小児科学研究の現況を報告します。

研究発表の現況

2000～2011 年から査読のある英文誌に掲載された論文数を大学小児科 (80 施設) と小児病院内科 (21 施設) にアンケート調査を実施した結果、回収率は 84.2% でした。2011 年の論文数は 2000 年に比し 22%

減少しています (図 1)。

2000～2011 年の PubMed 収録英語論文数も 2000 年に比し 17% 減少しています (図 2)。日本の小児科から Pediatric Research, Pediatrics, J Pediatrics に掲載された論文数も減少傾向にあります (図 3)。日本全体でみた PubMed 収録英語論文数は 2000 年に比し 15% 増加しています (図 4)。わが国における小児科研究の衰退は明らかです。

国際的にはどうでしょうか? 米国の小児科は 43% 増加しています (図 5)。アジアではどうでしょうか? 中国小児科の論文数は 2000 年に比し 9 倍に増え、数年のうちに日本を追い越しアジアで 1 番になりそうです。韓国も 6 倍に増加しています (図 6)。

考 察

アンケート調査でも PubMed 検索でも、世界へ向けての研究成果の発信数は減少傾向にあります。代表的な小児科英文誌 Pediatric Research, Pediatrics, J Pediatrics への掲載論文数も減少しており、日本の小児科の研究活動は質の点からも低下していると考えられ

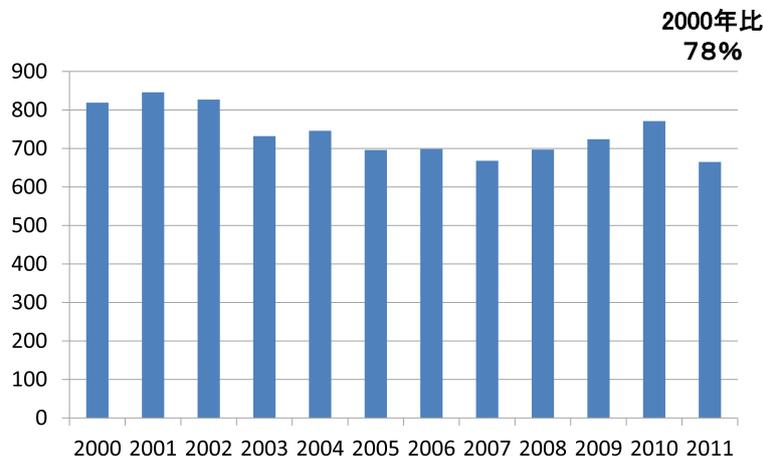


図 1 査読のある英文誌に掲載された論文数 (日本小児科学会調査結果)

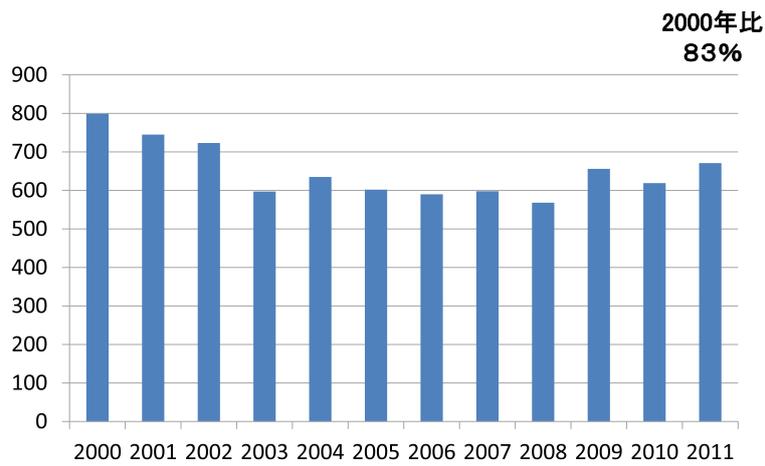


図2 PubMed 収録英語論文数：日本の小児科. 検索条件：japan [Affiliation]) AND pediatrics [Affiliation] + japan [Affiliation]) AND children's [Affiliation]

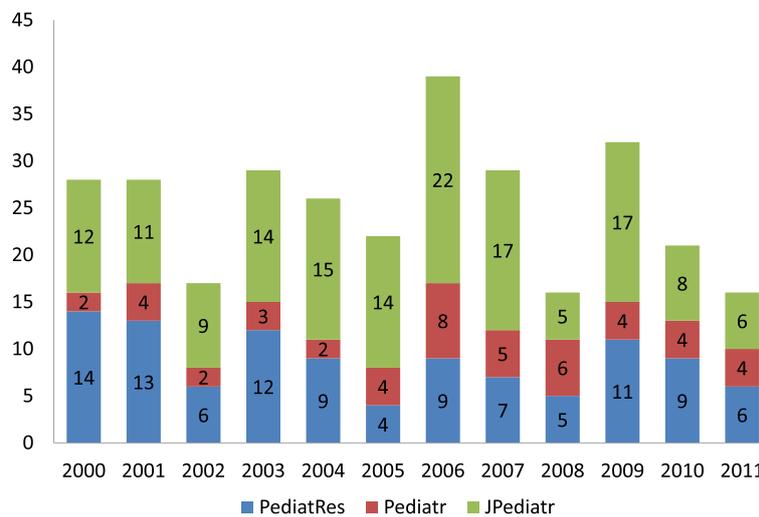


図3 日本の小児科から Pediatric Research + Pediatrics + J Pediatrics に掲載された論文数

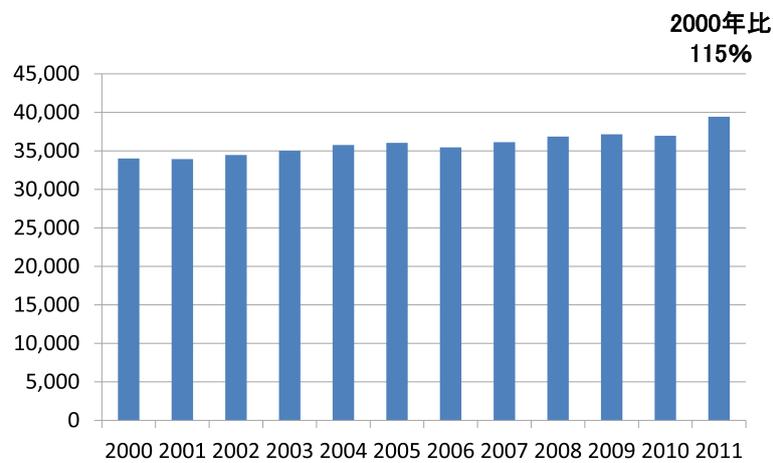


図4 PubMed 収録論文数：日本全体. 検索条件：japan [Affiliation]

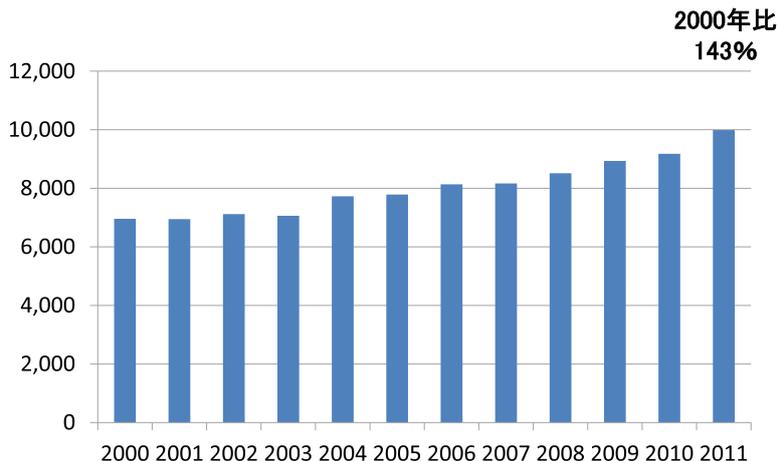


図5 PubMed 収録英語論文数：米国の小児科. 検索条件：usa [Affiliation]) AND pedi-atrics [Affiliation] + usa [Affiliation]) AND children's [Affiliation]

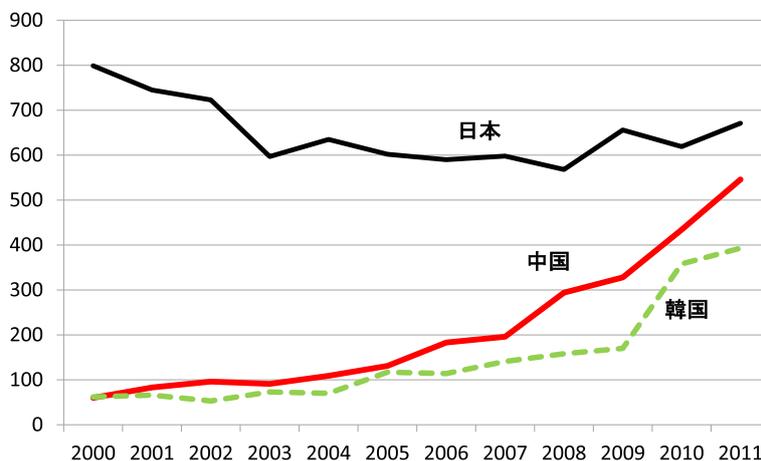


図6 PubMed 収録英語論文数：日本・韓国・中国の小児科. 検索条件：japan/korea/china [Affiliation]) AND pediatrics [Affiliation] + japan/korea/china [Affiliation]) AND children's [Affiliation]

ます。

現在の状況が続けば、わが国の小児科学の臨床、研究面でのプレゼンスは世界の中ではもちろんのことアジア地域の中においても低下することが危惧されます。これは結果的にわが国の子ども達へ不幸な結果を招くこととなります。日本小児科学会は学会として臨床・基礎研究を促進する仕組みを模索し、積極的に若手・中堅小児科医の臨床・基礎研究への参入を促す施策を実行する必要があります。地方会，地区学会，分科会，小児科関連の国際学会など、いずれのレベルにおいても学術活動をさらに活性化する努力が求められています。臨床と研究とは表裏一体の関係にあります。

わが国の小児科学の臨床を世界に負けない充実したものにするためには、小児科学の研究をこれからも活性化することが不可欠です。

おわりに

日本小児科学会研究活性化ワーキンググループではこの現状を打破するために、リサーチクエストの作り方・研究を通した臨床レベルの向上・論文の書き方等の研究の面白さを伝えることのできる研究活性化のためのセミナーを企画しています。会員の方からも研究活性化のための方策をご提案いただければ幸いです(提案先：日本小児科学会 jps-q@mirror.ocn.ne.jp).